ここからはじまる

コミュニティ政策って何だろう？

加藤　颯

はじめに

このブックレットは立教大学コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科がどのような学問を学んでおり、どのような四年間を過ごすことが出来るのか、私自身が卒業前に知りたい！という気持ちから制作を始めました。四年間をコミュニティ政策学科で過ごしてきた中で日常的に「コミ政って何やってるの？」と色々な人に聞かれることを経験してきました。しかし、それに対して答えるときは「んー、一年生の時は貧困とかの勉強してて、二年生ではまちづくりとか地域行政！でも…、三年生は廃校活用とかリノベーションみたいなことやってたんだよね…笑」と、正直上手く話すことが出来ないのが正直なところでした。

このようなことからもコミュニティ政策学科で過ごした私自身の四年間がどういったものであったのか整理したい、さらにはこれからコミュニティ政策学科で学ぶ後輩たちの四年間をゼロからのスタートではなくて、イチに少しでも近づいた状態でスタートを切れるお手伝いが出来たら良いなと思い、まとめさせていただいています。

本冊子を作成するうえで最も時間を割いたことは「わかりやすさ。」のただ一点です。卒業論文では体裁や客観性、根拠などをはっきりと示したうえで論文をまとめなくてはなりません。しかし、私自身そういったものを読むのが苦手であることや、本当に伝えたいことを表現する最良の手段であるとは思えなかった為、卒業作品としてブックレット化をするに至りました。高校三年生や大学一年生が読んでもコミュニティ政策学がどういったことなのか少しでも理解できれば良いと願ってまとめております。

本冊子の構成はコミュニティ政策について整理したうえで、実際に四年間をコミュニティ政策学科で過ごしてきた私自身の友人との対談から紐解き、私自身の考え、読んでいただいている皆さんに伝えたいことの順でまとめています。どこから読んでも読めるように工夫をしましたので、ぜひご一読いただけると嬉しいです。

なお、本冊子の冒頭では『新・コミュニティ福祉学入門』と『コミュニティ政策学入門』を参考に話を展開します。テキスト内において使用されている文献引用を本冊子で使用する際に関しましては一律でテキストそのものを参考文献の扱いとさせていただきますのでご了承ください。

目次

はじめに

第Ⅰ章　1

コミュニティ政策ってなんだろう

〈コミュニティ政策〉って何だろう／「福祉」とは／いのちの尊厳のために／地域福祉ではなく…／

コミュニティってそもそもなんだろう／コミュニティ政策をかみ砕く／コミュニティ政策で大切な視点

第Ⅱ章　11

学生との対談から考えるコミュニティ政策

第Ⅲ章

37

四年間通して今考えること

四年間通して今考えること／四年間を振り返る／卒業作品としてコミュニティ政策学科と向き合う中で／

コミュニティ政策学科ってなに？

おわりに／読んでいただいている皆さんへ

第Ⅰ章

コミュニティ政策ってなんだろう

まず、コミュニティ政策とは何かを整理するうえで、本パートでは高校生との授業形式で話を展開していきます。皆さん自身、学校の教室にいる気持ちになって読んでみると面白いかもしれません。

〈コミュニティ政策〉って何だろう

いきなりですが、皆さんは「コミュニティ政策」と聞いて何かわかる人いますか？

・・・わからないです。

それでは「コミュニティ」と「政策」をそれぞれ分解して考えてみるとどうですかね。コミュニティは何となく人と人のつながりとか仲間意識とかそういったイメージを持てるかもしれません。実際に「コミュニティ」とネットで検索をしてみてください。色々な人が手を取り合っているイラストや様々な国の人が一緒になっているイラストなどが多く出てきませんか？ ほとんどがイラストです。一方で「政策」と聞くとどうでしょうか。国の偉い人たちがやる行政や、区役所、市役所などが想像できるかと思います。正直、お堅い感じでしょうか。では、それを足し算した言葉「コミュニティ政策」と聞くとどうでしょうか。漠然としたイラストとお堅い感じの足し算です…。正直ピンと来る人はいないのではと思います…。

私の経験談にはなりますが「コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科って具体的に何をやっているの？」とよく聞かれることがあります。私自身その説明には毎回難しさを覚えます。実際のところ何をやっているのだろう…福祉？政策？なんかそれだけでもないような…と日々考えさせられる毎日です。

ではコミュニティ福祉が何かを説明した上で、コミュニティ政策はどんな考え方から来ているか紐解いていきます。

「福祉」とは *1

それではまず「福祉」について考えてみましょう。漢字の大半は中国に由来するものなのは皆さんも知っているかと思います。「福祉」はどのような意味になるでしょうか。≪福≫と≪祉≫どちらも同様のことが言えますが、もともとの意味として≪福≫ ≪祉≫ともに〈しあわせ〉という意味を持っています。このことから福祉とは「人やコミュニティ、物が良い状態にあることや良くなるための条件そのもの」であるとされています。

しかし、〈福祉＝しあわせ〉という意味だよといわれても現代に生きる皆さんには実感がわかないと思います。皆さんは「福祉」と聞くと介護や障害者の支援、さらには貧困などの社会の中で弱い立場にある人への援助などが思い浮かぶでしょう。もっと言えばプラスのイメージよりもマイナスなイメージを持っている人もいるのではないでしょうか。「福祉」という言葉は昔の中国で生まれた単純な意味の〈しあわせ〉ではなく、そこから多様に枝分かれをし、現代の日本では〈年金・医療・福祉〉といった言葉でひとくくりにされています。「福祉」は比較的弱い立場にある人への支援や援助を行う意味になっています。

いのちの尊厳のために

さて、皆さんは【健康】って何だと思いますかね。健康について考えた際にどういった状態を考えますか？ 世界保健機関（WHO）の定義では【健康】とは身体的・精神的・社会的に完全に「ウエルビーイング（Well-being/健康）」な状態としています。しかし、反対意見として「完全な状態」が健康とされるのであれば生涯にわたって身体的・精神的にハンディキャップを持つ人はずっと不完全であり、その考えに入ることができないのではないかという議論が巻き起こ

りました。このことから個人が元から持っている潜在能力を最大限引き出すための「ウエルネス(Wellness)」という考え方が誕生しました。障害者などでも出来ることは必ずあり、それを最大限に活かしてみようという考えが中心となっている言葉です。

そして立教大学コミュニティ福祉学部が大切にしている「いのちの尊厳のために」はウエルビーイングからウエルネスに変化する考え方の中で非常に大切な言葉になりました。コミュニティ福祉学部初代学部長である関正勝先生はウエルネスへの移行に伴い、

「WHOの健康観は、それを妨げるマイナスな現実を否定的にしか評価しえない。結果として存在の序列化をもたらし、差別を排除、隠蔽の社会をつくりあげていることになっている。(中略)私たちは「良好な状態」としての健康観ではなく、そのような完全な状態から、失われていく現実を向き合い、その現実と共生できる態度の強靭さこそを健康ということを可能とされるのである。(中略)したがって、そのコミュニティには誰一人不必要な人間は存在しない。いや、すべての存在はその固有性(ユニークネス)にあってコミュニティに不可欠な存在として生きることが可能になるのである。」

と主張しました。私たちの人間関係や私たちの住む社会において誰一人として不必要な人はおらず、障害や社会的状況においてハンディキャップを抱えている人でも、存在そのものが必要不可欠であるということを言っています。

地域福祉 ではなく…

ここまで「福祉」と「いのちの尊厳のために」とはどういうことなのかを整理してきましたがどうですかね、少し難しいですか…？ 続いて皆さんと考えたいのはなぜ「コミュニティ福祉」かということです。地域福祉ではいけない理由について考えていきます。

まず地域福祉とはどのような意味か整理をすると「すべての人が抱える可能性のある生活上のさまざまな困りごとを住み慣れた地域社会で、その人らしい暮らしのまま続けていけるようにすること」とされています。短く言えば「住み慣れた地域で、その人らしい暮らしを続けること」です。しかし皆さんが住む「地域」とは、住み慣れた地域社会だけでなく離れた地域での結びつきや海外支援など世界規模での関わりも多くなってきていますよね。食べ物は輸入されていたり、地球の裏の問題が私たちの生活に直結したりすることは日々多発しています。

このようなことが日常的になっている現代の社会では住み慣れた地域社会にのみ目を向けている「地域福祉」という考え方ではフォローしきれていないのが現状です。この点において住み慣れた地域社会に加えて、離れた地域や世界規模での関わりに対しても「コミュニティ」＋「福祉」という「コミュニティ福祉」の考え方は含んでおり非常に大切になっているのです。

コミュニティってそもそもなんだろう

ではコミュニティ福祉やコミュニティ政策と何度も伝えてきましたが「コミュニティ」とはそもそもどういったものなのか皆さんと一緒に整理していきたいと思います。

コミュニティという考え方は歴史的に見ると一九世紀～二〇世紀の初めころに誕生しました。思ったより最近ですね。

産業革命の時代です。蒸気機関の改良で産業が大きく変化したときです。これ以前、人々は村の集落で暮らす村落社会でした。しかし、産業革命がきっかけで次第に出稼ぎのために都市部へ人が集まる都市社会が出来上がりました。都市社会では企業や官庁の分業化が進み、特定の仕事内容や目的に応じてグループを作っていきました。皆さんの学校の委員会や係の人たちで集まるようなものです。そのグループでは人はかわりのきく歯車のような存在、人間味のない機械のような存在でした。このようなグループが出来上がったのが産業革命の頃でした。

一方でこのようなグループが作られたことで「家族」や「地域社会」といった人々が繋がりながら共に支え合って暮らしていく生き方に目が向けられました。一人一人が不可欠な存在である、人間味のあるグループの存在が「家族」や「地域社会」にあることに人々が気付き、このようなグループを「コミュニティ」と呼ぶようになりました。

コミュニティは今の私たちの生活に目を向けてみるとあらゆるところに同時に存在していることがわかるかと思います。学校や職場・習い事・ご近所さん・遠くの地域・インターネット内などありとあらゆる場所や空間に存在しています。皆さんも学校だけでなく、塾などの習い事や地域の人と集まる機会などを経験したことはあると思いますが、それに非常に近いものです。インターネットにおいてもゲーム内のつながりやインスタグラム・ツイッター、ライングループなどもコミュニティの一種とカテゴリされてきています。

そして日本がコミュニティの大切さに気付いたのは一九六〇年代の中頃でした。これまた最近ですね。皆さんのおじいちゃん・おばあちゃんが二〇代とか三〇代くらいの時です。高度経済成長期において産業構造の変化や交通網の整備、通信の発達などの技術革新が起こりました。さらには都市に多くの人が集まったことから農村の人が減少するなどの社会変化にもつながりました。その一方で急激な工業化による環境汚染や騒音などの公害、都市部で家が不足したり、保育高齢に関する課題が日本各地で同時に発生したりとマイナスな側面も高度経済成長期には発生しました。このことから政府がコミュニティや市民社会のつながりを再考する目標を設定する事態となり、日本でもコミュニティの存在への意識や活用について議論がされるようになっていきました。

コミュニティ政策をかみ砕く＊Ⅱ

ここまで福祉にまつわる考え方とコミュニティとはどういうものなのか整理をしてきましたが、ここからはコミュニティ政策がコミュニティ福祉の中においてどういった位置づけなのか考えていきたいと思います。

さて話は変わりますが、皆さんが街を歩いている時にタバコの吸い殻が落ちていたとします。この吸い殻は誰が拾いますか…？

住民？

ボランティア団体？

ごみ拾いをしてくれる会社？

そうですね、色々なパターンが想定できるかと思います。北海道と九州、東京…、日本全国津々浦々で取り巻いている状況は違います。環境による違い、人口による違いなど色々あります。もっと目線を近づけて考えると、隣の地域と自分の住んでいる地域でも建物の雰囲気が違っていたり、人の雰囲気が違っていたり…。さらに言えば、足立区はヤンキーが多い、港区は社長、世田谷区は閑静な住宅街、横浜市は東京に対しての対抗意識があるといったことがテレビや皆さんの会話の話題に上がるのはそういったことに近いかもしれません。

このようなことから国や企業が複数の地域で同じ施策や事業を行ったときに、効果が出る地域もあれば、効果が出ない地域もある。地域ごとの差に対して住民がどのような意見を持っていて、どのような方法をとるべきか考えることは避けることができません。ヤンキーの説得と社長の説得方法はもちろん違いますよね。そして施策や事業に関わるのも

住民と考えれば住民同士のコミュニティづくりを行う方法を同時に考えることも非常に重要な観点になってきます。

このような考え方、つまり住民主体で行政や企業とタッグを組んで政策やまちづくりを考えていくのがコミュニティ政策学です。

コミュニティ政策で大切な視点

コミュニティ政策を考えるうえで誰も取りこぼさないことは非常に大切な視点です。先ほどお話した「いのちの尊厳のために」でも、誰一人として不必要な人はいないという視点がありましたね。

コミュニティというのは人々を包み込むパワーもあれば、人々を追い出すパワーもあることに気を付けなくてはなりません。学校でのクラスを例に挙げるとわかりやすいと思います。クラス内での友人関係を考えてみましょう。学校生活において数人で一緒に過ごすグループができることはよくあるかと思います。そこに新しい友達が入ってきて仲間が増えることもあれば、小さないざこざや考え方の違いなどたくさんの理由で「あいつのことハブろうぜ。」とグループの友達を失ってしまうようなことを経験した人や目の当たりにした人は少なからずいるのではないでしょうか。

そしてこのようなことが地域や国、世界規模で起きています。日本人というカテゴリに含まれない海外の人や隣国同士の関係性、村の外の人というような小さな規模での関係性が例としてあります。日本に住む他国籍の人に選挙権を与えないことや、村の中で「あいつはよそ者だから〇〇はさせない…」と孤立させるようなことです。コミュニティにおいて関わる全ての人を巻き込みながら歩んでいく方法、誰もハブらない方法を考えるのもコミュニティ政策学の大切な役割です。

参考文献

*Ⅰ　坂田周一、二〇一三、「コミュニティ福祉学の構想」、『新・コミュニティ福祉学入門』、坂田周一編、有斐閣ブックス、一―一一。

*Ⅱ　坂田周一、二〇一四、「コミュニティ政策学とは何か」、『コミュニティ政策学入門』、坂田周一編、誠信書房、一―二八。

第Ⅱ章

学生との対談から考える

コミュニティ政策

この章では、コミュニティ政策学科の学生6名との話し合いを対談形式で構成しました。色々な経験を持った学生たちのありのままの言葉をお届けしています。

これからコミュニティ政策学科に関わってくれる皆さんにはコミュニティ政策がどのような魅力を持っているのか、その反面マイナス要素はどのようなところにあるのかを考える良いヒントになるかと思います。そして、今現在、コミュニティ政策学科に関わっている皆さんにはコミュニティ政策の一人では気づくことのできない視点や魅力などを必ず提供することができると思います。私が話を聞きたいと思った友人です。自信はありますよ。

構成としては対談形式で、話題のトピックごとに題名をつけさせていただいています。ぜひ興味を持った人や内容から読んでみてください。加えて、学生との対談のあとにコミュニティ福祉学部にも深くかかわっていただいている立教大学の職員の方々との対談もご用意しています。そちらも併せて読んでみてください。

何となくコミュニティ政策学科に入っても！

コミュニティ政策学科　椙山（すぎやま）太賀

ゼロから始まったコミ政、そして後悔と選択

加藤：椙山くんは立教のコミュニティ政策学科に入りたかった理由とかあったんですか？

椙山：正直な話をすると何となく立教大学に行きたいっていう目標はありましたが、コミュニティ政策が第一志望ではなかったんですよね。池袋キャンパスで学んでみたいとか、大学生！みたいなのに憧れがあって、受験の時に先生や塾のチューターの人におすすめされたのがコミュニティ政策学科に入学するきっかけでした。

加藤：そうなんですね。自分自身は何となくまちづくりとか地域に関わる人々を見てみたいという理由で入学を決めましたが、椙山くんは明確な目標とかやりたいことがない状態からのスタートだったということですか？

椙山：はい（笑）正直何をやる学部なのかもわかっていないし、強いて言えば社会科の教員免許を取ることができるから、就職活動とかで困った時の保険になるかなとか程度の考えしか持っていませんでしたね。

加藤：興味分野でもないし、なんとなくたまたまという要素が強いってことですよね。

椙山：そうですね、本当にゼロベースからのスタートという感じでした。

加藤：これ、一度聞いてみたかった質問なのですが、四年間通して、大学生活を評価するとしたら何点になりますか？

椙山：ぱっと思いついた数字は七五点ですね。（笑）残りの二五点減点したのは、コミュニティ政策学科の学生ってすごく熱量を持って、軸をもって活動しているのを友人の姿から見ていて感じていまして…。自分自身はその熱量を持つことができなかったこと、「やらない」という楽な選択肢を選んだ自分に後悔しているらですかね。

加藤：後悔が残ってるんですね。

椙山：うん、そうです。四年生の今が楽しくないわけでは決してないけれど、ちゃんとやりたいことをもって行動している人がうらやましく見える、第三者から見てちょっとだけいいなと思ってしまうのも込みでマイナス二五点にしました。（笑）

加藤：後悔が少しだけあって、コミ政に入学したときはゼロから始まったわけですが、四年間と通してつまらなかったですか？

椙山：興味がないと思っていたところからの始まりではあったけれど、無理して通っていたわけでもないし、本当に興味のないことだけだったら多分続いてはなかったと思います。その点でいえば、コミュニティ政策学科での学びを通して、やったことや訪問した場所から得たことが自分にとっては刺激的だったから何だかんだ充実していたのかなと思いますね。

加藤：ゼミは誰先生に所属していたんでしたっけ？

椙山：一年生の基礎演習は鈴木弥生先生、二年生の時は北島健一先生、三年生の時は木下武徳先生でした。基礎演習は正直、学生自身から先生を選ぶことはできないので何とも言えませんが、その時にやったことから高齢者への配食や移動販売車に興味をもって、二年生では北島先生のゼミを選択しました。けれど、その時のゼミを通して興味分野を極めることも大切だけれど、ともに学びを深める友人の存在が大切だと思って、仲の良い友人のいるゼミを三年生では選択しました。結果として、三年生ではホームレスについて中心的に学びました。そういった学び方がオッケーだったコミ政の懐の広さも魅力の一つではありますかね？（笑）

加藤：確かに、そうかもしれませんね。自分自身はやりたいこと、できることを中心にゼミを選択して二年生、三年生と過ごしてきた感じはありました。その点でいうと椙山くんの友人と学びを深めたいという選択はある意味で面白い着眼点かなとは思いますね。そして、それを実行できる環境もある。他学部でも出来なくはないことかもしれませんが、コミ政にはその環境が少なくともあることは証明されちゃいましたね。（笑）

自分自身の柱は一つでなくても良い？

加藤：四年間を通してゼロから始まりつつも、色々な先生を選んで学びを行ってきたかとは思います。それらを通してコミ政の魅力みたいなのは何かありますか？

椙山：色々なことを学ぶことができるのがコミ政の魅力だと思いますね。良い意味で学部学科に関連はしていてもとらわれすぎていない授業が多いと思います。「福祉」と聞くと介護とか、障害者みたいなわりとマイナスなイメージが先行する部分があったりしますが、そういうイメージを感じないのがコミュニティ政策学科な気はします。自分みたいにゼロベースの人が入っても学問分野の選択肢がたくさんあってやりたいことを見つけやすいというところが魅力だと思いますね。

加藤：確かに「福祉」って聞くとマイナスイメージが出てくる現状ってまだまだありますよね。自分も他学部の友人に一度「福祉って大変じゃない？」みたいなことを言われたことがあって、今ではそういうイメージは払しょくできていますが、当時は否定できない自分がいました。椙山くん自身は入学した頃はどういうイメージでした？

椙山：確かに最初は弱い立場の人への支援みたいな印象が強くありましたね。けれど、いまでは自分達に全く関係がないことではないのだなっていうのは強く感じました。悪い印象としてじゃなくてポジティブな考え方として学ぶことはできたかなと思います。

加藤：する側でもあり、される側でもあるというのはすごく感じましたね。片足を大学で突っ込んでからは自分自身も対象に含まれることは意識するようになりました。

椙山：本当にそうなんですよね。だれでも関わってくることだからこそ、色々なことを学ぶ必要性があるし、コミ政自体の守備範囲が広い。自分自身、ゼロからのスタートであったからこそ、一つの社会問題、福祉問題に絞らないで学ぶことができたと思っています。様々な分野に対して自分自身の知識の柱を立ててみました。東日本大震災やホームレスなど色々でしたね。だからこそ、今では広い視野で物事を考えることができていることにつながっていると思います。

加藤：確かにコミ政って一つの社会問題に軸足を置いて活動している人が目立っている印象はありますよね。けれど、椙山くんみたいに軸を一つに置かずに色々なことを学んで柱を立てていく学び方も一つの大切な手段であるなと感じました。自分自身、一つを深く学ぶスタイルをコミ政で貫いていたので良い視点を得ることができたかなと思います。ありがとうございました。

人に優しくなれるし、感謝できるようになる

コミュニティ政策学科　西潟花（にしかた）

日常生活で使えるコミュニティ政策

加藤：お久しぶりです。唯一の同級生で出身高校が同じなのでぜひと思いインタビューさせてもらいました。対談形式で恥ずかしいけど、四年間の話聞かせてください。（笑）

西潟：よろしくお願いします。（笑）

加藤：では、早速にはなるのですが西潟さんがコミュニティ政策学科に入学したきっかけを教えて欲しいです。

西潟：正直に言うと唯一受かったところだったからですかね。けれど、コミ政を目指した理由ははっきり持っていて、高校三年生の受験期に凄惨な事件とか、好きだったアイドルが自殺して亡くなったニュースとかを目にして、人の命って脆いな…って。どんなに幸せそうに見えている人でも悩みとか暗い部分は抱えていて、そういったことに気がついて、人のために何かできることを学びたいと思ってコミ政を目指した感じです。今では「運命の学科だった！」と思えるくらいにはなっていますね。

加藤：運命の学科ですか！ すごいですね。少し偏見が入っているかもしれないのですが、どのような理由であれコミュニティ政策学科に入った学生って比較的満足度が高いというか、楽しそうにしていると言いますか、そんな印象があるんですよね。自分自身も入ってよかったと思っている側でしたし。

西潟：色々なことを学べたかなって思っています。コミュニティ政策学科って幅広いし、一年生の時から広すぎてわけがわからなかった印象がすごくありましたね。けれど色々なことを学んだからこそ、人に優しくなった気がしています。（笑）小さいことかもしれないけど、電車で人に席を譲るようになったり、ヘルプマークを付けている人に目が行くようになったりしましたね。

加藤：確かに意外と日常生活でのモノの見方が変わったのは自分もそうかもしれませんね。

西潟：東日本大震災の復興支援に行ったのも、コミュニティ政策学科に入ったからかなってすごく思っていて、池袋キャンパスの学部とかに入学していたら、行ってなかったかもしれないです。

加藤：立教大学の各センターが主催するイベントとかプロ

グラムのどこに行っても、大体コミュニティ福祉学部の人が何人かいる印象があるのですが西潟さんの印象ではどうですかね？ある意味でコミュニティ福祉学部の各学科の強みになっているとも思います。

西潟：確かに皆がそれぞれ色々なことをやっているイメージはありますね。海外行きまくっている人もいれば日本中ぐるぐるしている人もいる感じです。

加藤：国内を見る一方で海外にも行って学ぶことができる、コミ政の面白さですよね。懐が広くて、国内も海外も一つの学問で学ぶことができますしね。

西潟：最高ですね。全部が人やコミュニティという点でつながっていて、途中で興味分野の方向転換をしても転換した先に色々な先生が待っていてくれるから、全然違うテーマでやり始めても問題はないですね。

加藤：そうですね、自分自身も一年生の時は貧困とかやっていたけど、二年生の時はまちづくりとか地域活性化についてやって、三年生の時は廃校活用とかリノベーションとかそういうことやって、四年生の時はその先生のもとで教育の観点を盛り込んで…、なんか幅が広いな、何やってんだろみたいな感じはすごくありますね。

感謝！

加藤：西潟さんがコミュニティ政策学科で一番学んだこと、得たことって何ですかね？

西潟：今まで自分がどれだけ恵まれた環境で生きていたかをすごく実感しましたね。大学までずっと公立の学校でお金もそんなに困っていなくて、授業で貧困とか障害のある人とか外国人の労働問題とかの話を聞たり、細かく見たりして実感しましたね。色々な立場の人のことを自分事として捉えることができるようになって…、障害を持った人とかを街で見ても、今までは目に留めなかったかもしれないです。けれど、何か手伝えることないかなとか少しでも気が向くようになったし、大学に来ていることもすごくありがたく思ってちゃんと授業も受けるようになりましたね。

加藤：ただ何も考えずに大学生活を過ごしているだけでは

気づけない視点ですよね。人の生き方とか、人にまつわる課題や問題を見つめる機会が多かったからこそ、そう思えるのではないかなと感じます。

西潟：そう、その点でいうとコミ政にはすごく感謝しています。「何学部ですか？」って後輩によく聞かれることがありますが、「コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科です」と自信持って言えますね。（笑）「人のためになることを学んでるんだよ」ということをみんなには言っているかなと思います。自分の誇りとは言い過ぎかもしれないけど、私は一番いい学部だと今では思っていますね。

加藤：べた褒めしすぎかもしれないですけど、立教大学の中で一番優しくて人間味のある学部ってコミュニティ福祉学部だと思いませんか？（笑）周りの人がどう思っているかはわかりませんが、自分は言い過ぎではないと思います。西潟さんは「福祉」に対してのイメージが入学前と今だと変わりましたか？

西潟：最初、コミュニティ政策学科に決まった時は悪い意味で「マジか」と思ったり、福祉に対して暗かったり、重かったり、社会問題だったり、命の重さだったり、それを高校生ながらには感じていましたね。けれども、入ってからは良い面も悪い面も見ることができて、知れば知るほど福祉に関わっている人がいるからこそ世の中が成り立っていることに気が付いて、誰かしらがやらなくてはいけないものだし暗いイメージなのは変わらないけれど、もし介護の仕事とかをやりなさいって言われたら前ほどは「嫌です」とは言わないかもしれないです。高校生の時は嫌だと言って絶対に拒んでいたと思いますが、今だったらもしかしたらオッケー出すかもしれないです。

加藤：福祉系や、そういった関連の職業はまだ世の中的に言えば給料が低いとか言われちゃう部分は少なからずあるけど、必要不可欠な職業ではありますよね。今後もその大切さは増してくでしょうし。

西潟：ありがたい存在だし、誰かがやらなきゃいけない。福祉に関わっている人達は自分よりも目の前の人の為を思って働いていることに気が付きましたね。素直に尊敬できるようになったから、私は福祉へのイメージがすごく変わったかなと思っています。

加藤：対談形式で話したことなかったから、すごく楽しかったです。ありがとうございました。

コミュニティ政策学科の留学生としての視点

コミュニティ政策学科　姜泰均（カンテギュン）

日本に住む留学生だからこそできること

加藤：韓国から留学生として日本に来てコミュニティ政策学科に入学したのは、どういう経緯があったのか教えてください。

カン：自分自身、高校生の時は理系だったんですよね。それで日本留学試験というのがあって留学するときにやる試験なんですけど、そのために色々な科目を学びました。その時に初めて文系科目を学んで、特に近現代史とか比較的最近起こった事件とかにワクワクしましたね。今の自分が最近の出来事の影響を受けて生きているし、現在進行形なことを学ぶ感じが文系だなと。好きでした。そして、先生にどういう学校が良いか相談した時に何校か出してもらいました。そこではいろいろな問題について取り組むことができる学部学科というのを中心に結構挙げてもらって、その中でコミュニティ政策学科と縁があった流れでした。

加藤：色々な問題に取り組みたいという着眼点で大学を選んだっていうことですよね。この対談形式のインタビューを何人かにするという話になった時に、コミ政で四年間過ごしてみて学んだことを自分自身がはっきり説明できなかったことから始まっているんです。ある意味でコミ政の良さなのかもしれないけど、それを見つけたいと思って…、色々な学問の先生が揃っているが故にたくさんのことを学べたり、それぞれ学生のやっている事が違ったり、本当に色々な問題に取り組めている印象はありましたよね。実際入ってみてどうでした？

カン：すごく感じたことが、結局自分から選んで授業を取らないと色々なことを学べないということです。どこの大学でも同じだとは思いますが…（笑）自分に彼女が出来て、親にあいさつ行ったことがあるんです。その時にどんな勉強しているのか聞かれて、コミュニティ政策学科を説明しにくい部分は確かにありました。コミュニティや政策って何なのかはっきり言えないっていう経験はあったかもしれないです。

加藤：少しそこについて考えてみましょうか。一年生の時から考えましょう、一・二年生の時にカンくんは何を学んでいたんですか？

カン：一年生のときは少子高齢化に興味があって取り組んでいましたね。ワークライフバランスとか、いい家庭を作ることを考えるために色々な授業を取っていました。けれど勉強していく中でせっかく留学にきているんだからその強みを活かしたいなと思って、二年生からは鈴木弥生先生のゼミで海外のことをやりたいと思うようになりました。そこからは鈴木先生のゼミで学びました。

加藤：鈴木先生のゼミで実際に日本の外のことを中心に学んでみて、どのような印象を受けましたか。

カン：コミ政は多くの学生が国内で起きている問題とかを中心に取り組んでいるイメージがありました。けれど鈴木先生は海外中心で、自分は北朝鮮の問題と韓国の問題について解決したいなと考えて学んでいました。コミ政全体から見ると少し特別感のあるゼミかもしれないけれど、同じゼミの人はバングラデシュのこととか色々な海外の問題について取り組んでいたから、入って良かったと感じましたね。同じような考えの人が集まっていたから楽しいし、勉強にもなりました。

加藤：日本に来て、色々学んでいく中で卒業後はどのようなことをやってみたいかイメージを持っていたりするんですか。

カン：うーん、難しいですよねぇ…。

加藤：例えば、一年生の時に思っていた卒業後の姿と今思う卒業後の姿は違いますか。

カン：一年生の頃は職業とかについて正直考えてなかったです。けれどNPO団体とかで母子家庭に関わったりする仕事とかをやりたいなというのは思っていました。その当時は事例とかほとんど見ていないし、どんな仕事なのかも分かっていなかったですが。わかりやすく言えば誰かを助けるサポーターみたいな仕事をしたいなっていうのがありました。

加藤：なるほど、今だとその夢はどうなっていますか。

カン：それまでは少子高齢化とか母子家庭とかにアプローチしたいと思っていましたが、多くの国が少子高齢化を抱えていて、もう世界各地にあることだからあまりにもこの問題は広すぎるな、難しいなって思うようになりました。だからもっと一点に絞りたいと考えて、自分は韓国人だから北朝鮮にも行けないし

…、だから韓国人としては正直何もできないけれど、日本に住む留学生としてできることっていうのは何かないのかなと思うようになりました。そこから、朝鮮半島の問題を解決したい、取り組んでみたいと思っています。日本に残って色々働いてみたい、活動をしてみたいというのは考えていますね。

夢中になれる場がある！

加藤：留学生として、コミュニティ政策学科に入学して、どういう大学生活でしたか…？ 大きな気づきになったこととかってありましたか。

カン：すごく夢中になれる時間だったかなと思います。何かの問題や課題に対して、大きな夢や目標をみるとその分失敗したときの反動も大きい…。けれど大きい夢をみることも大切なのかなと今は思いますね。夢中になって取り組むことで、解決できなくても何かしらの影響は残る…。その影響も夢中で取り組むほど小さくはないはずですよ。夢中に取り組める場所っていうのがコミュニティ政策学科だったかなっていうのはすごく感じています。

加藤：確かに守備範囲が広い学科だからこそ、誰でも何かしら興味の引っ掛かるところがあったりはしますよね。その興味を軸に勉強や行動をすると夢中になって頑張れるのかなとは思いました。

カン：実際に問題を解決できなかったとしても、何かしらの影響は与えていると思いますよ。その影響一つ一つが集まってやがて解決に繋がっていく…みたいなことを願って自分は夢中になって行動出来ていました。

加藤：ありがとうございました。

コミュニティ政策学科に興味が無いなりに。

コミュニティ政策学科　粟飯原百花（あいはら）

コミ政に入って気づいたこととは…

加藤：二年生のゼミが原田晃樹先生で一緒だったとき以来ですよね（笑）三年生のときはオンラインにもなりましたし、お久しぶりです。粟飯原さんの四年間の話を聞かせてください。

粟飯原：よろしくお願いします（笑）

加藤：いきなり突飛な質問にはなるのかもしれないですけど、粟飯原さんの大学生活四年間振り返ってみてどうでしたか？

粟飯原：とりあえず目先のものばっかり取り組んでみたというのが自分の四年間だったかなと今は思います。気分に任せて色々やっていたかな…。具体的に何をやったかというと、大きな事だと三年生のときに外部の先生のゼミを履修してみたり、社会調査の履修をしたりしました。とりあえずやれるもんはやろうという感じで、何でもかんでもやった感じです。行き当たりばったりでした。（笑）

加藤：二年生の時に少し聞いた覚えはあるのですが、コミ政に入学したのはどういう経緯でしたか？

粟飯原：入試で受かったからが本当のところです。コミュニティ政策学科はいろいろなことを勉強できそうで良いなって第一印象としてはありましたね。でも自分が特にコミ政でこれをやりたい！っていうのはなかったです。じゃあ、今もあるかっていうと難しいところなんですけど（笑）

加藤：やりたいことなかったっていう人多いですよね。でも、コミ政の人って何だかんだ満足しているような印象があったりして…どうですか。

粟飯原：私自身四年間で何かしらの信念を持ってなにかを成し遂げたっていうことを言えないんですね。けれど普通に大学生活が楽しかったし、いろいろな経験ができたと思っています。自分は興味の分野がどういうところにあるのか分からなくて…。新しいことを得れば得るほど、どの分野も学ぶことが多いなって思いました。新しい知識を取り入れて、それが活かせるかはわからないけど、何事にも価値があるなと思ったので興味が無かったなりに学び続けることができましたね。

加藤：なるほど、確かに自分自身も知らなかったことを知

れた時の快感というか、キター！ みたいな感じ、すごく好きです。（笑）

粟飯原：私自身、高校では偏差値とか大人の言うことに縛られていたので、いまは自由に学べている感じにはすごく価値があるなと思います。けれど大学では良い意味で自分の無能さを気づく機会になったかなと思っています。

加藤　：無能さですか。

粟飯原：外に出てボランティアしている人とか、アクティブな人とか見て、自分にはできないな…と思いました。そこからは良い意味で、自分がやってきたことの狭さや無能さに気が付きましたね。

加藤　：多分ですが、偏差値の話とつながる部分があって、高校生まで求められていた学びの質と大学やコミ政で求められる学びの質って全く違う気がしているんですね。その中でこれまでの偏差値に収まらない能力、人間力を発揮している人がいて、そのような人と比べて、粟飯原さんは…みたいなことですかね？

粟飯原：確かに私自身、これまでは勉強して知識を付けていくっていうことやらされてきたから、それ以外の学び方が難しいかなって思いますね。その点でのズレっていうのは確かにあったのかもしれないです。

リソースとしてのコミュニティ政策学科

加藤　：いま、良い意味で無能さに気が付けたと話してくれましたが大学に入って粟飯原さん自身が変わったこととかありますか。

粟飯原：変わったことで言うと、勉強以外のことをやるようになったかもしれないです。例えば、ボランティアやったりとか、けれど一番は大学のリソースを使い倒すことに専念しましたね。実は、四年生になってもほぼ毎日大学に通っているんですよ。いまだに授業を受けてみたりとか、大学のイベントに参加してみたりとか…。大学一年生の時は日曜日とかもほぼ大学に行っていました。サークルとかじゃなくて、ずっと大学の図書館にいましたね（笑）

加藤　：他の学生は大学の外に出て、色々やっていたパターンが多いけれど、粟飯原さん

は外に出なかったパターンに近いですかね。

粟飯原：そうかもです。でも、図書館とかで色々な本読んだり、時間を過ごしたりしていて、自分自身まだ知らないことがたくさんあるなって。無知の知ではないけど、知らないことがいっぱいあるっていうことを知れたかなと思います。コミ政という興味のないことに飛び込んだが故に知らないことを知れたし、まだまだそういうことがいっぱいあるんだなとすごく感じました。

加藤　：無知の知であることを知るって、そんな大学生なかなかいないと思いますよ（笑）素直にすごいです。

粟飯原：毎日図書館へ行くことが一番楽しかった。本を読むだけじゃなくレポートやったり、新聞読んだり、時間を過ごすのが好きでしたね。ある意味でその行為っていうのが大学生としての自由を感じる行為でした。しなきゃいけない勉強ではなくて、自分が知りたいこととか興味を持ったこと、読んでみたいなって思ったことを図書館で行うことができたのが良かったです。大学での学びは知らなくても死ぬものではないから困らないし、だからこそある意味でその図書館での時間っていうのは大切でしたね。

加藤　：コミュニティ福祉学部やコミュニティ政策学科そのものがリソースであったということにもなりますかね？

粟飯原：確かにそういう意識はあったかもしれないです。知らないことを知りたかった四年間なのかなと思います。そのために、コミュニティ政策学科という手段・ツールをリソースとして使って、色々なことをしていた感じかもしれないです。

加藤　：無能や無知の知というキーワードをだしてもらいましたが、粟飯原さんの軸になっているところ…。それがマイナスに捉えることもできるけど、逆に「無能だから」といったことをプラスに捉えて、知りたい学びたい！ という意欲に変換できたのかもしれないですね。ありがとうございました。

人とのつながり、学びとのつながり

コミュニティ政策学科　齋藤優太

社会と繋がるきっかけにコミュニティ政策

加藤：大学では東日本大震災の復興支援に数多く関わっていましたよね？

齋藤：そうです、高校の頃に被災地に行くプログラムに参加したのがきっかけで関わるようになりました。大学に入学してからはこれまで以上に自由な時間があって、アルバイトしたお金もあるし、社会勉強になるかなと考えて東北に通うようになりましたね。

加藤：被災地とかに行ってみて一回で終わってしまう人とかいると思うけど、通うようになったのはどうしてですか？

齋藤：当時、テレビとかでは見ることができないリアルな現場を見て、その時の自分でも東日本大震災で被災された地域の人々にできることがないかなと深く考えさせられて、何度も通うようになりました。

加藤：なるほど、そのような経緯があって何度も通っていたのですね。そんな齋藤くんが四年間コミュニティ政策学科で学ぼうと思ったきっかけって何かありますか？

齋藤：大学は座って授業を聞いているだけじゃなく、大学の外に出て学ぶことができる学部や学科に入りたいなと思ってコミュニティ政策学科を選びました。実際に大学に入ってみると一年生のころから「外に行ってこい」の雰囲気はすごくあったかなと思います。

加藤：確かに「行ってこい」の雰囲気がすごくありましたね。

齋藤：そうですね、学科の他の学生も色々なフィールドに出て行ったりしていたから、そういう人たちから刺激をもらったかなと思いますね。

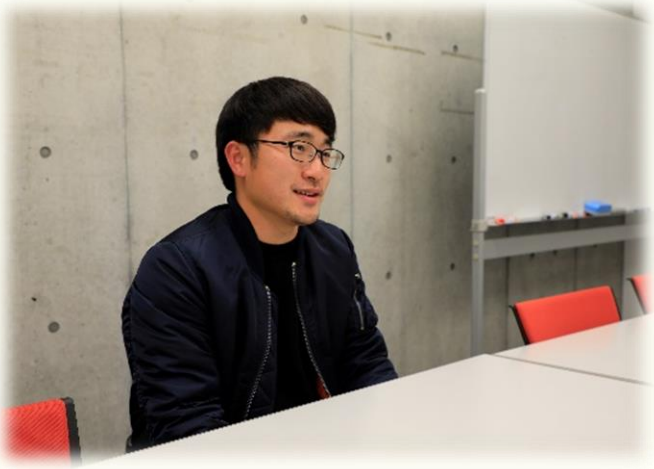
加藤：外から見たらボランティアとかを地域でやったりして意識高い系とか思われることってあったかもしれないけど、そういったことが平然と行われていて、政策学科の学生たちもわかっている感じは確かにありましたよね。

齋藤：それに加えて、たまに現場で見たことと座学で学んだことがリンクするっていう魅力が強くあったと思います。このことに気が付いてからは座学がメインというよりは座学をいかに上手くこなして外に学びに行くか、外の経験と座学をつなげるかの方に集中しましたね。

加藤：外の経験と大学の中での学びが結びついた経験は何

かありましたか？

齋藤：被災地とかの色々な場所には行っていたけれど、違う場所も見てみたいと感じるようになりました。三年生のゼミでは全国の地方の地域活性化とかをテーマにして動いていました。外での学びがあったからこそ、大学での座学を活かして、次の場所に行ってみたいと思うようになる一連の結びつきはあったかと思います。



社会に溶け込んで学ぶことができる？

齋藤：座学じゃないという話を結構してきたけれど、先生たちが研究したことや考えたことを学生たちが学んで吸収する。そして、学生たちがフィールドに散ってくという流れにとらわれないのがコミ政だと思うのですがどうですかね。

加藤：スタートの起点が大学じゃなくて地域にあるってことですか？ 外で見てから、大学で学ぶという順番ってことですよね。

齋藤：そう、授業だけを聞くと机上の空論みたいな…、コミュニティって人々のつながりとか対人間とかの話であって、事例とかを授業で知ることはできてもテキストの中で人間の営みのそのものを学ぶっていうのは難しいものがあると感じます。

加藤：確かに法律とか経済とかと違ってコミ政は座学の学びだけでは終われない学科かなとは思いますね。ある意味でそれがコミュニティ政策学科の強みにもなっているような気はしますね。

齋藤：その点において授業そのものではコミュニティ政策学科はおすすめできないですね。ただ授業だけ受けていたらつまらない学科であって、外に出てやっと良さや魅力がわかる。だから自分で大学の外に出て

地域を見る、そこから戻ってきて大学で知りたい情報を学ぶというプロセスで付加価値を自分でつけられればよいかなとは思います。

加藤：なるほど、大学で学んでからではなくて、地域に軸足を置いて大学に学びに行くという視点は自分自身持っていなかったです。

齋藤：だからこそ、コミ政の学びって、とても地域に溶け込んでいるともいえるのかもしれないですね。社会問題とか地域の課題とかを色々なところに行って学んできて、大学に戻ってきてコミ政で学べば、その問題は必ず授業内やゼミの中で知ることができて…。図書館に行く感覚に近いのかもしれません。知りたくなった時にコミ政に来れば、自分の行動や活動にリンクしていることが多くあると思います。

加藤：高校もそうだし、他学部と大きく違うところってある意味でそういうところにあるかもしれませんね。高校まである程度範囲の決まったパッケージになったものを学ぶのが正しいこととされているみたいな風潮があって…。でも、コミ政に入って気づいたことは、パッケージになっていないそれぞれの地域に住む人々のそれぞれの生活を見つめる必要性。そこから考えることや感じることがある。それを大学に持ってきて、理論や事例、研究としてパッケージになったものと掛け算してまた新しい考えを生むような作業ができたような気はしています。

齋藤：確かに、学科のみんながボランティアとかの色々な分野で活動していても、コミ政の学びのどこかには多くの人がヒットするかなと思いますね。結局人とのつながりとしての「コミュニティ」だから、大学に戻った後もコミ政には関心のあるテーマが用意されているのかなと感じます。（笑）

加藤：なるほど「知りたいことが知りたくなった時に得ることができる学部＝コミ政」みたいなことですかね。その知りたくなったことに関する専門的な先生がいらっしゃって、どこにでもエキスパートが用意されている感じに近いかもですね。

齋藤：そういうことです。

加藤：それは齋藤くんが東北や色々な地域で外に出て活動していたからこそ気づけたことで、大学内に留まっている人だと気が付けなかった考えかもしれませんね。ありがとうございました。

コミュニティ政策学科の良い面も悪い面も

コミュニティ政策学科　栄田（えいだ）美月

何もしないこともアリです。

加藤：いきなりこのような聞き方をするのはどうかと思いますが、四年間どうでしたか（笑）

栄田：大学生って、人生の中の夏休みという表現をされること多いですが、なんか私にとっては良い意味でも悪い意味でも結構夏休みになったかなと思っていますね。コミ政は必修科目が少なくて自分がやりたいことや受けたい授業をバイキング形式で選べたっていうのが私の中ですごい印象に残っていて…。だからそういうやりたいことができたのは、本当に夏休みだったなって思います。あとは新座キャンパス自体がのほほんとしているから私にとっては夏休みだったなって本当に思います。（笑）

加藤：まさに人生の夏休み謳歌した感じはありますよね。栄田さんはコミ政に入学した時にやりたいと思っていたことは何かあったんですか。

栄田：私は広島県出身で、実は東京・埼玉に来た理由って広島から逃げるためだったんです。関東の大学に入学したんですけど、一番初めに大学に入って決めたことは「何もしないこと」を決めました。

加藤：え、何もしないことですか？

栄田：大学一年生から私自身の核にそれはあって、行き当たりばったりでやってみよう、眼に飛び込んだことをやってみようということを大切にしました。高校生までの私はこうすれば大学受験に有利になるかなとかを考えた上で、色々なことをやったけれども、特に自分の為になったと思えませんでした。だから大学入学する時に唯一やりたいと思ったことは何もせずに大学四年間、目の前にあることだけをしようと思ったんです。

加藤：けど、本当に何もしないということは大学にいる限りは無理だと思うんですが、その中でもやったこととかはありますか。

栄田：やっぱり、一年生の頃はそうは言いつつもやらなきゃいけないなと思って、色々と削ぎ落とした結果、フィリピンにサークルで行ったのと手話サークルに入りました。手話サークルに関しては唯一、大学に入ったらやろうと思っていましたね。母親が手話得意な人で、姉もちょっとできるからやっておこうと思っ

て。同じ国の人なのに喋れないのって悲しいなとも思っていました。

加藤：今も続けているんですか？

栄田：コロナがあったりして、ほとんどサークルもやめちゃいました。色々と削ぎ落としちゃいましたね。けれど今も続けていることで、大学二年生の秋から読書はしていました。読んだ本を書き留めて、内容とかを記録していましたね。なんかそういう削ぎ落としから、無理して色々やらなくてもいいのかなと思えるようになりました。本を読んで記録を書いている人はあまり大学生にいないから、結構面白い人にはなれたのかなと今では思っています。（笑）

経験重視が魅力だけど…

加藤：コミュニティ政策学科の魅力ってどこにあると思いますか？

栄田：色々あるとは思いますが、第一に何をしても良いし、どれだけやっても良いところだと思います。良い意味で放っておいてくれる。コミ政の放任主義がすごく良いなと思う一方で、困ったら助けてくれる先生がいる手厚さも兼ね備えている点ですかね。あとは良くも悪くも体験重視で、今までの経験に基づいたレポートを書けば高評価が取れる余地のある学科なのかなとも思います。ある意味でコミ政の弱点にもなるかもですが。

加藤：経験重視が強みでもあり、弱みにもなるということですか…。もう少し詳しく聞きたいです。

栄田：いつも思うのは池袋キャンパスの図書館はいつ行っても多くの席が埋まっていて使えなかったりするんですが、新座キャンパスの図書館はいつでも席が空いていてスカスカなんです。これは学部や学科のカラーが結構表れているなと考えていて、実践や経験を重視するあまり座学的なことが少し疎かになっているのかなとか、あまり本読む子がいないのかなって私は思いますね。

加藤：確かに経験や、実例、見聞が重視されているからこそ、書こうと思えば調べなくても書けるっていうところは否定できないですね。

栄田：コミ政は歩いて考える感じですが、もう少し座って考えるとか、論文を考査する授業があってもいいのか

なと思います。私自身、真面目人間だから余計に。（笑）アウトプットをしすぎると枯渇しちゃいますからね。自分から積極的に求めに行かないとインプットが無い学科とも逆に思える時があります。

コミ政の授業を通して感じたこと

加藤：面白い視点でドンドン情報もらえて楽しいです（笑）栄田さんが四年間通して感じたことって何ですかね。

栄田：理想と現実のギャップですかね。貧困とか学んでいるコミ政の学生自身は、差はあれど大学に行けるぐらいの経済的余裕がある人たちだから、高いところから見おろしている感じっていうのは完全に消えないなとも思いました。貧困とか教育格差とかを学ぶ学部で学科であってもやっぱり学生の中ですら経済的な格差っていうのはあったりして…。なんかそういうところを目の当たりにしてしまうような、現実と理想のギャップも見てしまう、学科だなって言うのは思ったりはしましたね。

加藤：実際に突き付けられるものはありますよね。

栄田：論文に書く対象者っていうのは、私たちに書かれるために生まれてきたわけでもないし、生活しているわけでもないわけですよね。けれどレポートとかで実際の人たちを書かなきゃいけない時もあったりして…、けれどその人たちを使っている気になってしまった自分もいて、実践に基づく学科だからこその気づきもありましたね。

加藤：確かに、矛盾しているようなことも含めて考える機会は数多くあった気はします。けれど、そのようなことに気が付けるのって少ないと思いますね。

最後におまけです。

栄田：あとは最後に関係ない願望・アイデアなのですが、コミュニティ政策学科は二年生の時まで必修でゼミがあるじゃないですか。ある意味で担任の先生がいるみたいな感じだから、四年生の最後の時期にその先生と一五分間だけ面談をするみたいなことがあっても面白いんじゃないかなと思います。自分自身の大学生活を振り返るためにも、卒業の段階とかでやるだけでもコミ政らしくて魅力になるのではないかと思います（笑）

加藤：確かに基礎演習の人たちで入学から四年後に改めて集まる機会とかあったら面白いかもしれないですね。ありがとうございました。

コミュニティ福祉学部に関わる方のお話

コミュニティ福祉学部インターンシップ・キャリア支援室
コミュニティ政策学科卒業生　安部温代さん

加藤：よろしくお願いします。まず、安部さんがどのようなお仕事をされているのか教えてください。

安部：コミ福の学生に特化した支援を行うインターシップキャリア支援室でキャリア支援を担当しています。キャリア支援といっても「就活」そのものではなく、学部で学んだいろいろなことから、自分がどんな風に生きていきたいかなどを考える機会を作っていけたらと思ってやっています。私自身はコミュニティ政策学科の一期生です。

加藤：大先輩ですね。（笑）安部さんのご経験からコミ政の特徴や魅力ついて色々教えてください！

コミ政は振り幅が大きい？

加藤：自分自身、この四年間でコミュニティ福祉学部って何なのかというのがハッキリしないなと思っていまして…。じゃあ自分が学んだこと何？と思った時にそれをはっきりと示せないことにもモヤモヤしていて、安部さん自身、卒業されてどう考えているのかお聞きしたいです。

安部：「貧困」や「障害」といったキーワードに関心を持っている学生は多いのですが自分自身の思っていた以上に福祉の幅が広くて、あれもこれも関心がある…、と広がりすぎて結局わからなくなっている学生は多いですね。

加藤：なるほど、その気持ちわからなくないです。コミ政自体、色々な事をやっていて「で、結局どっちが正しいの？」みたいなことはよくあります。（笑）

安部：私自身コミ政を卒業して、会社で働く中で新人社員の指導などを担当しましたが、自分とは別の視点で物事を考える力を持っていない人が多くいるなと感じました。私がコミ福に戻ってキャリア支援に携わるときは、視点の違いを学生が経験できるような機会を作りたいなと思っていました。

加藤：実際に学生と関わる中で他学部と比較して、コミュニ

ティ政策学科の良い面ってどこに感じますか？

安部：立教大学は全学部にキャリアサポーターがいて、定期的に学部間の情報交換をする場があります。そこから思うこととして、コミ福は全学部の中で一番多様性が高いなと思います。三学科にそれぞれ違う傾向の人がいて、なかでもコミュニティ政策学科は立教大学の全学部の中で一番、就職先に多様性があるという特徴がありますね。最近は公務員を目指す学生が増えてきていますが、色々な所を見ている学生がいるからこそ、就職先が多様になっているのかなと思います。

加藤：確かに、友人も公務員になる人もいれば、ゼネコンもいたり、介護もいたり、…色々な学生がいる感じはしますね。けれど、卒業後の進路をしっかり各々が決めて進んでいますが、コミ政になんとなく入学した学生がすごく多い印象なんですけどどう思いますか？

安部：確かにそう思いますね。でも、そのなんとなくだからこそ一番振り幅が大きい。何にでもなれるっていう可能性があるんじゃないかなって思いますね。

コミ政の学生が持つ力とは…

加藤：安部さんが卒業されて、改めて社会からコミュニティ政策学科を見た時にどういう印象でしたか？

安部：コミ福って優しい人がすごく多いですよね。私が思うのは、ここにいると傾聴力が当たり前に鍛えられるかなと。

加藤：傾聴力ですか。

安部：色々な当事者を見る機会が多いのだなと感じます。実際に現場の人の声を聴いて物事を考えていく…。この傾聴力の高さっていうのは財産だと思います。会社とかで傾聴力がある人がチームの中にいると接着剤みたいな役割になって、チームが同じ方向に向いていけますし、絶対に大切だと思います。あとは例えばボランティアで支援する側の立場ってどの学部でも味わう機会が多いと思うんですけど、支援される側の立場を日常的に考えられる学

部ってそんなにないかもしれないなと思いますね。

加藤：確かに、まずは聞いてから、見てから、考えるようになれたのは大学入ってからな気がします。

安部：その一方で、私の話ではなく他の職員が言っていたことなんですけど、コミュニティ福祉学部って自己肯定感が低い学生が多いのかもしれませんね。これは私の理解ですけど、傾聴力が高いことの裏表かなと思います。聴くことは一旦自分の意見を我慢していることにもなっていて、我慢の積み重ねが自分のことは後回しでいいんだ…、と自分を大切にする気持ちが薄くなっていく傾向があるのかなとも思いますね。自分の意見を言って、議論できる場づくりも非常に大切なのかなとも思います。

加藤：最後になるのですが、今後コミ福コミ政は形を変えながらも残っていくと思います。そのような中で入学してくる学生や関わってくれる人たちに伝えたいこと、大事にしてほしいこととかありますか？

安部：一歩踏み出すことを恐れないでほしいなって思いますね。新しいことだけでなく、人との出会いもそうですね。授業で先生に質問したことで、先生が何かボランティアを紹介してくれたりすることがあるかもしれないですし、どんなことが自分の引き出しを開けてくれるかっていうのはわからないので、小さな一歩でも踏み出すことを恐れないでしてほしいなと思います。色々な価値観に触れて吸収してほしいです。

加藤：自分自身その一歩でつながったこと大学生活でいっぱいあるのでとても共感できます。ありがとうございました。

コミュニティ福祉学部に関わる方のお話2

ボランティアセンター　茅芙美さん

コミ福の学生ってどんな雰囲気？

加藤：ボランティアセンターで学生と関わっていく中で、コミュニティ福祉学部ってどのような印象ですか？

茅　：私自身、新座キャンパスに五年間いて、コミュニティ福祉学部、観光学部、現代心理学部の三学部と関わっていく中で、それぞれカラーが違うかなとはとても思っていますね。ボランティアセンターに来てくれる学生と話す前になんとなくこの学部だろうなって言うような雰囲気が分かったりとかするくらいには違います。（笑）その中でのコミュニティ福祉学部の学生は、実直でとにかく素直な印象を持っています。けれどその反面、どこか不安感があるというか自己肯定感が低いような学生が多いかなっていう印象もありますね。

加藤：不安を抱えている、ですか…。どのような不安ですかね？

茅　：不安を抱えているというか、社会とつながることにすごく敏感で繋がりたいと思っている学生が多いかなという印象があります。だから福祉とかコミュニティ、地域とか、そういうところに関心があるのかなとも思いますね。コミュニティ福祉学部の学生と話していると、この学部になんとなく入ったっていう学生も少なからずいて、観光学部とか現代心理学部は最初から入りたいと思って入学する学生が多いけれど、コミュニティ福祉学部はなんとなく入ったりとか、公務員になりたいから入ったりという学生がすごく多い印象があります。

加藤：確かに公務員になりたいという学生も一定数いますし、なんとなく入学した学生も一定数いますよね。

茅　：ただ話を聞きながら、学生の気持ちを引き出すと、すごく面白い形で色々なところにつながっていく学生が多くて、皆真面目だし、ボランティアとかをいざやってみるとポテンシャルが高いなっていう感じはしています。

学科同士でも四年間で全然違う

加藤：コミュニティ政策学科って学問の幅広いのが特徴かなと考えているのですが、職員として関わっていても感じるところってあったりしますか？ 例えば福祉学科は福祉学科で技術的な話や国家試験的な話が入ってくるから福祉の専門家になる人が割と多い印象があります。イメージでしかないけど、観光だったら旅行とかツアーコンダクターになりたいとかわかりやすいものが一つあるかなと思うんですけど…。そういうものがコミュニティ政策学科には無いのかなと思いますね。どうでしょうか。

茅：本当にそう思います。福祉学科の学生はコミュニティ政策学科の学生とは全然カラーが違っていて、コミュニティ福祉学部の中でも分かれている気はしますね。コミュニティ政策学科の人と話をしていると色々なところに関心があって…、まちづくりとか、地域コミュニティとか、多岐にわたっているなというのは思います。

加藤：職員の方々から見てもそのような印象ってやっぱりあるんですね。

茅：福祉の学生は、精神領域とか子ども領域のこととか、ある一定の枠の中で学んで特化していく印象があります。次第に広いところから狭くなっていって、専門的になっていく感じですかね。その逆で、コミュニティ政策学科の学生は狭いところから広がっていく印象があります。知らないところからどんどん知識を付けていって、広がっていく感じですね。良い意味で最後にどこに転がって行くか分からないっていうイメージがボランティアセンターのスタッフの中にあります。（笑）

加藤：福祉学科は専門性を高めて、政策学科は専門性も付けつつ、学問領域を広げていくという視点は考えたことなかったです。いわれてみれば学生の立場からしても、何となくそのような雰囲気を感じる時って確かにあります。

茅：ボランティアセンターでも福祉学科の学生は自分の興味のスポットを絞りたいからボランティアをやりたいっていう学生が多く来てくれていて…。その一方でコミュニティ政策学科の学生は自分のスポット

を広げたいからボランティアをやりに来ている学生が多い感じはあります。

加藤：面白いですね。確かに自分自身の経験から、同じ学部や学科なのにマッチングしない学生っていうのはいるのなと感じる時があります。なんかこの人自分とは違うな、噛み合わないな…、みたいなことあるんですね。それって、福祉と政策の違いのように同じ学部や学科にいるのにその違いがあることが面白さになっているのかなと、今の話を聞いて思いました。ありがとうございました。

第Ⅲ章

四年間通して今考えること

四年間通して今考えること

ここまで第Ⅰ章ではコミュニティ政策とはどういうことなのかをコミュニティ福祉学部のテキストである『新・コミュニティ福祉学入門』とコミュニティ政策学科のテキストである『コミュニティ政策学入門』をもとに紐解いてきました。そして第Ⅱ章ではコミュニティ政策学科に在学している学生たちの声を対談形式でまとめました。加えてコミュニティ福祉学部に関わっている職員の方々との対談もまとめた上で、コミュニティ政策学科がどのような学びをすることができるのか良い面も悪い面も含めて考えることができたのではないでしょうか。

さて、ここからは私自身のコミュニティ政策学科での四年間を簡単に振り返っていきたいと思います。そして、その上で「コミュニティ政策学科って何？」という問に対して私なりの見解を示すことができたらと考えています。

まずはこれまで数十ページに渡ってコミュニティ政策や学生のことをまとめてきましたが、私自身のことを一切書いていなかったので、この場を借りて私自身の大学生活がどのようなものであったか簡単にお話できたらと思います。あくまでも立教大学の数万人いる学生の一学生の事例と見解であることはご承知ください…。

四年間を振り返る

入学してからの気づき

私は「座らずに人と関わりながら学べるところが良いな」と考えてコミュニティ政策学科に入学しました。入学して最初に興味を持ったフィールドは子ども食堂や子ども食堂に関わる家族についてでした。私の出身が東京都荒川区で、区内には子ども食堂や居場所づくり、区役所、社会福祉協議会などが連携した「あらかわ子ども応援ネットワーク」というものがあります。このネットワークの活動に知人の紹介で関わるようになりました。実際に多くの団体の活動に参加する中で、一人の学生には抱えきれないような問題を持った家庭などと関わる機会などもありました。虐待、不登校、生活保護の不正受給など様々な課題が現実にあるということを自覚しました。コミュニティ政策学科でそのようなことを学んでい

たにもかかわらず、実際の現場を目にするとそれぞれの人や家庭によって抱えている問題は異なっており、大学だけで学ぶことは偏った視点や考え方になってしまうなと強く感じるきっかけとなりました。

大きな挑戦とそこからの気づき

そして、様々な視点から私自身の住んでいる地域にある課題や実情を目にしていく中で、ＮＰＯや福祉的な活動をしている団体の実情、組織論のようなものに興味を持つようになりました。このことをきっかけに福祉活動がどの程度大変で、地域に根付いて持続的に活動するにはどうすればいいのか知りたくなり、団体の立ち上げに挑み始めました。そのときは「実際に団体を立ち上げてしまえば良いんだ！」とノリと勢いで始めましたが、今思えば良くやったなと思っています。

立ち上げに際して、中学校の頃の旧友たちとタッグを組み、東京都立高等学校推薦入試に特化した中学三年生向けの学習支援団体を立ち上げました。かねてから関わりのあった、あらかわ子ども応援ネットワークの加盟団体として活動をはじめました。

実際に立ち上げてみて、継続して活動を行う大変さは身をもって感じることができました。本職としての活動ではなかったので、普段の大学生活に加えてアルバイトなども行う中で時間を作らなくてはいけない難しさがありました。

しかし活動を行う中で、私自身の周りにある笑顔を大切にしていきたいと思えるようになりました。活動を通して参加してくれる中学生や社会人、学生などのふとした瞬間に見せる笑顔を見れた際に、私自身うれしい気持ちにさせられることが多々ありました。そしてどんなに大変なことや悩みがあろうと、笑顔でいられることや笑顔を作るお手伝いができる学びをコミュニティ政策学科でしていることに誇らしいと思えるようになりました。このことから四年間通して私自身と関わってくれる人たちの笑顔を作るきっかけになりたいと考え、継続して団体の活動などを行いました。

コロナと大学生活

私が大学二年生の終わりの頃に新型コロナウイルスが流行し始めました。そこからは早い話で一気にオンライン授業になり、大学に通うことも無くなってしまいました。オンライン授業になった直後は今まで通っていた新座キャンパスに行かなくて良いことが少し寂しかった反面、圧倒的な楽さから嬉しい気持ちもありました。

しかし、オンライン生活を続けていく中で私自身ができることは何もないとモヤモヤする日々でした。さらに授業自体も生の声ではなく機械を通したデジタル的な音声であり、一〇〇分間集中するのは無理な話であることを学生ながらに実感しました。繰り返される緊急事態宣言などで様々な活動が制限され、大学三年生が終了しました。その頃には何に対してもやる気が起きない一人の学生が完成していました。

四年生になり、少しずつ行動制限が緩和されていく中で大学の友人や知人と会う機会が増えました。しかし、大学一年生や二年生の頃のやる気やエネルギーというものは戻らず、これから新しいことを始めるための時間がないという問題にも直面しました。

このことからも言えるように大学三年生、四年生は後悔が少なからず残っています。この後悔があったからこそ、周りの後輩たちやこれからコミュニティ政策学科に関わる人の力に微力ながらなりたいと思うようになり、授業のゲストスピーカーの依頼や学内イベントのお手伝いなどに参加しました。このブックレットを卒業研究で書きたいと考えたのもその一つです。後輩たちがコミュニティ政策学科でゼロからのスタートではなく、イチに少しでも近づいた状態で活躍してほしいと願っています。

卒業作品としてコミュニティ政策学科と向き合う中で

今回、卒業作品としてコミュニティ政策学科そのものと向き合う中で、インタビュー形式で対談をできたことは非常に良い経験であったと考えています。一つのテーマに対して学生同士で深く話し合う時間やタイミングは正直ありませんでした。そして対談を通して、コミュニティ政策学科がどういった学部か考えてみました。キーワードを羅列すると、幅広い学び、人間、コミュニティ、地域、ボランティア、何となく入った、経験、視野、やさしさ…。出し切れないほどの魅力やキーワードにあふれているなと感じました。コミュニティ政策学科の良さを「学びの広さ」と片付けてしまうのはあ

まりにも面白くなく、普通の解答になってしまうと個人的には思います。しかし、それも一つの事実ではあるのかなと考えます。対談で六人の学生に話を聞いただけでもそれぞれが違う感想や観点、価値観をコミュニティ政策学科から得ていること…それが何よりもコミュニティ政策学科の面白さであることは間違いないです。

しかし、それだけじゃないコミュニティ政策学科の魅力や強みが何かと考えたときには「一人一人が前を向いて進んでいること」が一つ挙げられるのではないかと私は考えます。コミュニティ政策学科にまつわることで言えば〈貧困や障害者などにまつわる問題／目の前にいる人を何とかしたい。〉、〈世界各地の地域に根付いている問題／私自身ができることは何だろう。〉といったように考えることを日常的に行います。さらに個人視点で言えば〈これからの自分はどうなるのか。／社会や地域の変化〉、〈自分は何をしたいのか。／コミュニティにおいての役割〉といったことを授業内や事例の知識を使って考えることができます。

これはコミュニティ政策学科が常に「人に始まり人に終わる」学問であるからだと考えます。立教大学全体の学部を考えてみた際に、ほとんどの学問分野は「人」そのものが関わってくる学問です。しかし常に「人」を考えている学問はそう多くないと思います。お金を増やすための「人」、組織をまとめるための「人」といったように何かしらの手段としての「人」ではなく、コミュニティ政策学科では目の前の「人」の課題を解決するために…、というところから学問が出発します。そして、その「人」が幸せになったり楽になったりする状態を目指すところに学問が終着します。コミュニティ政策学科の学生それぞれが、目の前の人ために行動をしたり、自分自身のために行動をしたり、これから先の社会課題に対して考えたり…と皆がさまざまな方向で前を向いて進んでいることがコミュニティ政策学科の持つ最大のパワーであり、魅力なのではないかと対談から強く考えました。（関係者の皆さん、この意見どうですかね…？）

コミュニティ政策学科ってなに？

さぁ、ついにこの時が来ました。「コミュニティ政策学科って何やっているの？」という問いに答えるお時間です。これまで、テキストのまとめや対談形式でのインタビュー、私自身の経験の整理を長々としてきましたが、ここで今出せる私自身の結論を出させていただきます。

コミュニティ政策学科って何やっているの？

えーとね、人づくりをしている学科かな！

という結論です。結局、抽象的に答えてしまいました…。（笑）

コミュニティ政策学科が何をしているのか考えた際に、学問的に言えば「住民主体のボトムアップによる行政の…」といったようなことになるかもしれません。しかしインタビューや私自身の経験を振り返った際に、確かにそのようなことも学んだ印象はありますが、それ以上になにか違うことを学んだ気持ちがあります。

ここでいう「人づくり」とは人材育成や専門職育成という話ではありません。人々がともに暮らしていくうえでの優しさや配慮、積極性や言葉選び、協力方法や寄り添う姿勢などの人間力に近いものです。このようなことを様々な立場の人々視点に立って考えることができる、自分事として捉えて考えることができるのがコミュニティ政策学科の学びなのではないかと私は考えます。いま、四年生の終わりの段階で「コミュニティ政策学科ってなにをしているの？」と聞かれたら、今回の卒業作品を通して私はこのように自信をもって答えます。

これをコミュニティ政策学科で四年間過ごした一人の学生の集大成とさせていただきます。

おわりに／読んでいただいている皆さんへ

このブックレットを最後まで読んでくれた方、本当にありがとうございます。どうでしたか…？ 少しでも何かのお役に立ったらうれしい限りです。

ブックレットの裏話をしたいと思います。卒業作品として取り組んだ冊子ではありますが、もし卒論書かなくていいの！ と喜んでブックレット形式の卒業作品を選択しようとするのであれば一切おすすめはいたしません、やめといた方がいいです。（笑） 文章を書くという点では卒業論文と大差ないものではあります。しかし、そこにデザインやレイアウト、言葉のチョイスといった要件が莫大に追加されます。あまりにも卒業論文より大変になりますので、そこはわかったうえで卒業作品を選択していただければと思います。（笑）

さて、ブックレット作成にあたりご協力いただいた方々には大変感謝しております。

まず、ゆーた、テギュン、たいが、花ちゃん、粟飯原ちゃん、栄田の六人は高校生、大学一年生二年生の時に大変お世話になって、私自身が大きな影響を受けた方々です。改めてこの場を借りて感謝申し上げます。本当にありがとう。

つぎに突然の依頼にも関わらずインタビューの快諾をしてくださった、安部さん、茅さんにもこの場を借りて感謝申し上げます。コミュニティ政策学科が大人にどのように見えているのか、そのほかにもブックレットには書ききれなったアドバイスなどとても参考になりました。本当にありがとうございました。

まだまだ感謝したい人はいます。このブックレット作成にあたってわかりやすさを突き詰めるために大学一年生なのにも関わらず何度もフィードバックをくれた夏実ちゃん、そのほかにも学習支援で関わっている高校生のみんなにも添削してもらいました。ありがとう。

そして、ブックレット作成にあたって調査方法などのアドバイスをしていただいた阪口先生ありがとうございました。正式な形でのインタビュー経験がなかったため、何をしていいのかわからず困っている中、ご提供いただいたアドバイス大変参考になりました。ブックレットの大きな部分をまとめる為の第一歩になったと考えています。本当にありがとうございました。

最後に権先生。三年生の頃からゼミに入らせていただいて、様々な視点を先生から学ぶことができたと感じています。大学生のうちに空間そのものを考えるとは正直思ってもいませんでした。しかし、先生のゼミで学んだ空間の考え方は既に学習支援の活動で活きていたり、様々な場面で役に立っていたりします。先生の下で学べてよかったと考えています。権ゼミに関しての記述が本文中に一切ないのはお許しください。（笑）

そして卒業作品をまとめるにあたって前例が少ないにも関わらず、快く引き受けてくださり本当にありがとうございました。権先生のもとでブックレットをまとめきれて、私なりの一つの結論を見つけることができたので、すっきりした状態で卒業ができると思います。本当にありがとうございました。

このブックレットを作成した中で強調して皆様にお伝えしたいことが、加藤颯ひとりの作品では決してないということです。先述した方々に加えて、これまで四年間のなかで関わってきた方々の存在があったからこそ、出来上がった作品だと心から思っております。一人では絶対に作れなかったです。私個人としては皆で作り上げた作品だと思っております。

このブックレットを実際に誰が手に取って読むのかは想像がつきません。私自身の後輩になるのか、先生方になるのかわかりませんが緊張はしております。後輩やこれからコミュニティ政策学科に関わってくれるすべての方々には自信をもってコミュニティ政策学科は良い場所であるとお伝えしたいなと思います。ブックレット内でのインタビューにすべてが書かれていますが、良い面もあり悪い面も持っているコミュニティ政策学科は、決して後悔はしないのではないかと思います。学問領域が広いからこそ興味を見つけることができたり、先生方は皆さんあたたかくアットホームな雰囲気で新座キャンパスに通うことができたりと色々な魅力があると思います。まだまだお伝えしたことは山ほどあるのですが卒業作品を作り上げた体力の限界で、これ以上は書かない方が良い気がしております。余計なことを書いてしまいそうです。

最後に私自身、嘘偽りなくコミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科で学べたことがとても良い時間であったと考えています。これまで様々な形で関わっていただいたみなさん本当にありがとうございました。これにてブックレットのおわりとさせていただきます。

二〇二二年一月一〇日

立教大学コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科　四年　加藤 颯